後期：アジアのキリスト教思想
Ａ．日本のキリスト教思想
１．植村正久　２．海老名弾正　３．内村鑑三　４．内村鑑三と無教会　10/30
５．京都学派とキリスト教思想　11/6
Ｂ．研究発表
６．研究発表１（齋藤、山田）　11/13　７．研究発表２（岡田、長原）　11/20
８．研究発表３（張、田中）　11/27
Ｃ．アジアのキリスト教思想
９．韓国キリスト教　12/4　10．民衆神学　12/11　11．中国キリスト教　12/18
12．キリスト教と土着化論　13．インドのキリスト教アシュラム　1/8
14．ピエリスの解放の神学　1/15　15．インドネシアのキリスト教　1/22

Ａ．日本のキリスト教思想
＜前回＞海老名弾正
（１）問いとしての日本とキリスト教
２．近代日本の国家建設にキリスト教を通して精神的に寄与するという明治の日本キリスト教の指導者の意識（キリスト教の側からのナショナリズム意識）と、明治期の形成過程にあった近代日本ナショナリズムのいわば中枢におけるキリスト教への否定的態度（井上哲次郎など）との間のずれ。
　日本的キリスト教：キリスト教的価値観を堅持した上でそれを日本の状況に応じて具体化するということにも、また日本の状況に合わせてキリスト教的価値観を変更するということにも、等しく用いることが可能。
（２）海老名弾正のキリスト教思想の諸特徴
１）海老名の議論の特徴
５．『基督教本義』(1903 年)。
　近代的な思想史研究の視点（歴史的方法）と体験主義とが結び付いていること。
　学問性を内に含んだ近代的な敬虔さは､シュライアーマッハー以来の学問的神学の特徴。
２）植村－海老名論争
６．『基督教本義』の成立事情。「植村－海老名論争」(明治 34-35 年＝ 1901-1902 年)を背景に成立。
９．この論争の意義は、個人や教派レベルでの異なる二つの信仰的立場の間の論争であるにとどまらず、むしろ、近代キリスト教の基本路線自体の評価を巡るものであって、いわば、同時代のドイツにおける「バルトーハルナック論争」に比することができる。
３）海老名の神学思想（『基督教本義』）
・自由主義神学者海老名 ──「ここに（キリスト理解に。引用者補足）海老名の自由主義神学の基本的問題があったのである」（土肥、1980、178）──。
①神学の場としての宗教経験・宗教意識
・近代ドイツ・プロテスタント神学：神学思想の成立の場を宗教経験あるいは宗教意識においた。「教義学」から「信仰論」への転換。
・海老名のキリスト教思想はこの自由主義神学の特徴をはっきりと有する。それは繰り返し登場する、心、人格、内面などの用語において確認可能であり、海老名自身この点を明確に意識していた。
・海老名において、宗教は人間の内的心の現実であり、人間は自らの良心においてその人格と道義を確立するのであって、ここから､「彼れの宗教と道徳とは人心の根底に存する」(62)という主張がなされる。海老名の宗教理解は、まさにカントあるいはシュライアーマッハーの影響下にある 19 世紀の自由主義神学の宗教観に立つ。
　「宗教の力は人格の内容となりて始めて至大の活動をなすものである。単に哲学者の問題となりては誠に乾燥にして人生に力なきに至る。例へばかの三位一体説の如きも当初

は如何ばかり人を慰め、人を高尚にしたか分らぬけれども、一旦之が教条となり単に神学哲学上の問題となるに至りては最早既に生命を失ひ却て弊害を残した。」(130)

②理想社会としての「神の国」

内面性における道義の確立は、社会関係において表現され具体化されると考えられねばならない。これは、自由主義神学の特徴でもあり、とくに自由主義神学の「神の国」理解の中に見ることができる。海老名においても、この特徴を見ることは困難ではない。

③キリストの人性の強調

・キリスト理解は罪理解と密接に関わっている。まず海老名の罪論について。

海老名の論点は、罪の議論は重要であったとしても、キリスト教においてそれよりも根本的なものは、キリストにおける神の恩恵なのである。

・罪論→キリスト理解：キリストは基本的には神ではなく人間である。

まず、新約聖書のキリスト理解に関して、海老名は次のように指摘する。

・キリストは人間であるという理解は古代キリスト教の代表的教父においても確認。

・海老名が強調する罪やキリストの理解の方向性は、キリスト教自体の中に存在している。とくに、海老名が依拠する 19 世紀の自由主義神学にあっては、海老名のような罪やキリストの理解も一定の広がりをもっていた。海老名のキリスト理解とシュライアマハーのキリスト論との間にはかなりの類似点が見出されるのではないだろうか。

（３）海老名の歴史神学

１）キリスト教の土着化論・受容論と海老名

10. 熊野義孝は、海老名を「思想の神学」と論じる中で、多岐にわたる海老名の思想内容を一貫して理解するための鍵として、「敬神の道」を挙げている（熊野、1982、152-153）。

11. 海老名のキリスト教理解においては、日本的なものとの結びつきがはじめより自覚的に存在していたのであり、「日本的キリスト教」はキリスト教信仰に後から接合されたものではない。

２）海老名の歴史神学

12. 海老名神学の中心がロゴス論であること。

ロゴスは、神的なものの内在化の原理として人間の宗教経験を成り立たせている。

ヨハネやオリゲネスのロゴス論を受け継ぎながら、海老名は、ロゴスを万物の創造の原理、歴史的発展の原理、そして宗教経験への内在化の原理として捉えている。こうしたロゴス論は、ロゴスの歴史的発展に基づく歴史理解（歴史神学）へと展開される。

16. 海老名の歴史神学：キリスト教の本質論（基督教本義）と本質の発展論という二つ面。

（４）自由主義神学者海老名、その意義と限界

20. 海老名では、批判原理も存在しないわけではないものの、基本的に形成原理が優位を占めている。

このように、新たな形体の創造建設という点に宗教的生命の主たる働きを見る場合、現実に進行する創造建設に対しては、それを宗教的観点から批判するというよりも、むしろそれを承認するという傾向が生じやすい。つまり、海老名のキリスト教思想の最大の弱点は社会批判の弱さにあった。近代的な精神性に合致し、近代国家形成を承認するキリスト教は、一歩間違えると、近代への埋没という帰結を生じることになる。ここに、海老名と彼の弟子たちの神道的キリスト教が、明治国家の戦争政策を批判できずに、朝鮮総督府のイデオロギーとして機能するに至る理由が存在しているように思われる。

21. キリスト教信仰から明治日本の戦争政策のイデオロギーへの転倒はいかにして生じたかのであろうか。

明治国家と近代日本の精神性は、その中にロゴスの発展を見ることによって、キリスト教と区別されつつも、キリスト教の立場から肯定できるものとなる。

22. ロゴス論を基盤とした海老名の自由主義神学は、このような論理の展開と転倒によって、明治国家への批判性を喪失し、明治国家の政策を肯定することへと道を開いたのではないだろうか。

３．　内村鑑三

＜内村鑑三＞ 1861-1930.

思想家、キリスト教伝道者。東京外国語学校を経て札幌農学校。クラークの残した「イエスを信ずる者の契約」（札幌バンド）に署名。M.C.ハリスから受洗（1878）。卒業後開拓使に就職、札幌教会設立。農商務省水産課勤務。84 年アメリカへ。知的障碍児養育院で働く。85 年、アマースト大学入学、総長シーリーの感化で＜回心＞を経験。ハートフォード大学入学、中退。88 年、帰国。

第一高等中学校勤務、91 年、不敬事件。退職。貧困の中、『基督信徒の慰』『求安録』など執筆。『万朝報』英文欄記者、『東京独立雑誌』主筆、ジャーナリストとして活躍。1900 年、月刊誌『聖書之研究』を創刊、聖書研究会を開始。無教会主義を唱道。足尾鉱毒事件反対運動を展開。ロシア開戦の状況下で非戦論を唱え、万朝報社を退社。第一次世界大戦が起こり、近代文明を批判し、再臨運動に参加(1918-)。

「生涯のモットーとした２つの J （Jesus と Japan）でもわかるように、日本の思想界に日本を超越する視点を、観念的ではなく血肉化して与えた影響は、キリスト教界にとどまらない」

（『岩波キリスト教辞典』より）

・官僚→教育者→ジャーナリスト→伝道者

・二つのフロント＝２つの J

↓

非戦論・愛国

日本的リスト教

（1）非戦論と愛国のメタファー化

「吾人は国家のため、霊性の救拯のために、神霊主義の大旗を掲げ、全力を尽くしてこの強敵（唯物的精神、引用者補足）を挫かざるべからず。キリスト教徒は日本帝国のためにこの国害を取り除く重任を負える」（植村正久「日本伝道論」、明治　27 年、88 頁）、「日本のキリスト教徒は非常なる熱情、壮烈なる志望とをもって、神に祷告し、今回の事変（日清戦争、引用者補足）が日本帝国の光栄を増し、将来に大関係ある履歴を作り、大いに世界の文明に与力する端を開くに至らんことを求めざるべからず。」(植村正久「世界の日本」、明治 27 年、95 頁）

１．二つの J

・愛国者としての出発、しかし、不敬事件（1891 年 1 月 9 日）。

・その後、非戦論を展開。同時代の民族主義としばしば軋轢を起こしながら、近代日本の戦争政策を批判しつつ、キリスト者として信仰を貫いた。一見すると、内村は反民族主義者であったかのように見える。しかし、依然として愛国者。

２．「小生は単なるクリスチャンの日本人として生き、普通の日本人として死ぬ事を願います。キリストと日本とは小生の合い言葉です。」（1885 年、新島襄宛の手紙）

↓

キリスト者としての自己同一性の原点である Jesus と自らが置かれた歴史的状況としての Japan、この双方を同時に愛する、これはどのようにして可能になったのであろうか。

２．内村が非戦論を唱えるようになった経緯（１、２、３の三つのステップ)。

１）日清戦争は東洋の近代化のための義戦である（『日本人の天職』（1892 年)、「日清戦争の目的如何」（1894 年)）

２）「＜義戦＞はほとんど略奪戦に近きものと化し、その戦争の＜正義＞を唱えた予言者は、今や深い恥辱のうちにあります。」（アメリカの友人ベル宛の書簡）

３）「余は日露非開戦論者であるばかりでない。戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうした人を殺すことは大罪悪である。そうした大罪悪を犯し

て、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。」(「戦争廃止論」)
３．問題は、「国あるいは民族を愛する」という場合の「愛」の意味、つまり、愛国とは何か、ということに他ならない。
４．「二つの J」の構造。同じレベルでの並置か？
内村の墓碑銘にも刻まれた、「I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God.」という言葉。
一定のコンテクストにおける「日本」→通常の「日本」(字義的？)からの意味の転換。
↓
日本と明治政府との区別。
理想と現実(「日本」の指示の二重化)。
現実の逸脱した民族主義と本来の目ざすべき民族主義との二重性が生じる。
５．現実の日本を批判しうる愛国
「日本」が進むべき道を誤ったときに、キリスト者は、「イエス」「神」という視点からそれを批判する義務を負っていることを意味する。
批判原理としての宗教(相対化の視点としてのキリスト教):「足尾銅山鉱毒事件は大日本帝国の大汚点なり。」(「鉱毒地巡遊記」)。
カント：幸福と正義(福と徳)との関係性。あるいは、共同体主義とリベラリズム
６．愛国の意味転換(＝メタファー化)
愛国の中身、愛する国の具体的内実が問題となる。
日本の近代化がめざした富国強兵(経済的政治的軍事的「強国」)から、農業を中心とした非軍事的な小国へ。
「第一に戦敗必ずしも不幸にあらざる事を教えます。国は戦争に負けても滅びません、実に戦争に勝って亡びた国は歴史上決して少くないのであります、国の興亡は戦争の勝敗に因りません、其の平素の修養に因ります、善き宗教、善き道徳、善き精神ありて国は戦争に負けても衰えません、否な、其の正反対が事実であります」、「国の実力は軍隊ではありません、軍艦ではありません、将た又金ではありません、銀ではありません、信仰であります。」(「デンマルク国の話」『後世への最大遺物・デンマルク国の話』岩波文庫)
７．「神の国」という尺度を用いた理想的な国家。
民族を超える民族主義(自己超越的民族主義)
cf. 自民族中心主義的排他的民族主義、脱民族的コスモポリタニズム
↓
開かれた形ある隣人愛：神への愛は、具体的な人間関係(隣人愛)において現実化するが、隣人愛の範囲は前もって限定できない。
↓
８．民族のメタファー化。
１）民族は虚構である。(第一度の指示の否定)
「人間集団は時間が経過するについてその構成員が必然的に入れ替わる以上、構成員自体の同一性を語ることはできない。そこで出てくる発想の一つに、民族には超歴史的な本質が内在し、構成員とは別にあるいは独立に実在し続けるというものがある」(小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会、2002 年、30 頁)。この民族実体論は虚構に支えられている。民族とは、血縁的つながりの延長上に自然に成立するものではなく、物語(民族起源神話)を介して、共同体的な構想力の作用に支えられてはじめて形成されると考えられねばならない。
２）虚構こそが人間的現実である。(第二度の指示の開示)
「民族が虚構にすぎないならば、なぜ民族問題がかくも恐ろしい力で人々を襲い、苦悩に巻き込むことがあり得るのかという疑問が持たれるかもしれない。しかし民族だけに限らず、個人心理から複雑な社会現象にいたるまで実は虚構と現実とは密接な関わりを持っている」(同書、59 頁)と言われるように、民族は共同体的な構想力の産物だから

こそ、共同体的な場において強力に作用するのである。
９．家族のメタファー化。

（２）内村鑑三の日本的キリスト教

日本のキリスト者にとって、日本人であると同時にキリスト教徒であることは、きわめて困難ではあるが、同時に、避けて通れない課題だったのである。この課題への取り組みは、一連の「日本的キリスト教」（日本に土着化したキリスト教）の主張となって現れるが、ここに、鈴木大拙の日本的霊性論と同一の問題意識を読み取ることができる。

９．内村鑑三の日本的キリスト教に関する発言から。
大正 9 年（1920 年）「日本的基督教」（『聖書之研究』245 号）。
「日本的基督教と称ふは日本に特別なる基督教ではない、日本的基督教とは日本人が外国人の仲人を経ずして直に神より受けたる基督教である」、「日本魂が全能者の気息に触れる所に、そこに日本的基督教がある、その基督教は自由である、独立である、独創的である、生産的である、真の基督教はすべて斯くあらねばならない、未だかつて他人の信仰に由りて救はれし人あるなし、而して又他国の宗教に由りて救はるる国ある可からずである。」（231）
↓
思想的経済的に西欧キリスト教から独立した自由な日本人による日本人のために伝道を行う教会、つまり、内村自身の無教会が目指したキリスト教。
10．キリスト教は外来宗教にとどまらず、日本的となり得る（大拙の議論における第一ポイントに対応）。
「もし基督教が日本の国体と相容れざるものならば、日本政府は己に基督教を禁じているはずであります」、「開国以来すでに七十年、基督教の禁制なき以上、国民は基督教と日本の国体とは併立し得る者と見て差支えないものと信じます。」（249）
日本政府がキリスト教を禁止していないのであるから、日本的伝統とキリスト教は両立するといった消極的論拠。
11．「基督教は亜細亜に起こった宗教でありまして、特に亜細亜人に適する宗教であります」（293）。
内村はドイツ・キリスト教の深い信仰心を高く評価しているが、その理由に関しても、「亜細亜人に最も豊富に具えられたる霊性が、西洋人中ドイツ人に最も克く発達しているからであります」（294）と論じる。「基督教は霊的宗教」であり、それは日本人を含むアジア人の霊性にこそ適合しているというのが内村の主張。
↓
キリスト教は単なる外来宗教ではなく、日本人の心情に根差したものとなるべきであり、またそうなることは可能であることが帰結する。
「日本人がクリスチャンであることによって、日本人でなくなるわけではない。それどころか、彼はクリスチャンになることによって、ますます日本人らしくなる」、「わたしがクリスチャンになってからは、以前にもましていっそう日本的になるとは当然であり」（301）、「聖霊が人間の上にくだるとき、聖霊は彼を独創的な人間にする。欧米の宣教師の信仰に改宗させられて彼らの真似をする日本人くらい情けないことはない。」（302）
12．内村の日本キリスト教：日本の現実に対する批判性を鮮明に示しており、この点でも鈴木大拙『日本の霊性化』『霊性的日本の建設』の議論（日本主義批判）と共鳴する。
「亡ぶべき日本あり、亡ぶべからざる日本あり、貴族、政治家、軍隊の代表する日本、これ早晩必ず亡ぶべき日本にして、余輩は常に予言して止まざる日本国の滅亡とはこの種の日本を指して云ふなり。」（124）
13．内村の滅亡予言における日本。足尾銅山事件に現れた富国強兵に奔走する日本。
「日本国が如何に危険の地位にあるかは鉱毒事件を見て最も良く察することが出来るの

であります。滅亡です、滅亡です、日本国の滅亡は決して空想ではありません」(132-133)。
14. 日本的キリスト教は愛国的使命をもつ。なぜなら、「聖潔の主」を呼び求める日本的キリスト教は、滅ぶべからざる日本を愛する真の愛国者に他ならないからである。
「ここの海辺、かしこの山里に正直にして国を愛する日本国の平民が自由の主なるイエスキリストの名を呼びつつあります」(136)。
15. 日本文化に土着化した日本的キリスト教はキリスト教自体に新しい可能性をもたらす。「日本人は西洋人よりも、殊に英米人よりも、より善く、より深く彼を解し奉るの資格を具へられたのであります。故に私どもは今日喜んで彼を迎へ、彼を殊に日本人の救主として仰ぐべきであります。これ彼の喜び給う所であるのみならず、又基督教国全体の喜ぶ所であります。基督教は日本人を待つて其完全に達するのであると思います。キリスト教について西洋人の解らない点がまだ沢山あります。それを闡明するが日本人の天職であります。」(296)、「日本は今や米国堕落の後を受けて、ここに再び基督教復興の功を奏すべきである。」(279)
16. 日本的キリスト教の使命（天職）＝キリスト教と日本（アジア)、あるいは西洋と東洋とを仲立ち。
「日本国は実に共和的の西洋と君主的の支那との中間に立ち基督教的の米国と仏教的の亜細亜との媒酌人の位地に居れり」(9)、「東西両岸の中裁人器機的の欧米をして思想の亜細亜に紹介せんと欲し進取的の西洋を以て保守的の東洋を開かんと欲す　是日本帝国の天職と信ずるなり」(12)
「日本国の天職」(明治 25 年・1892 年、31 才)。
自己の存在意味（天職）を「人類―日本―自己」という階層的連関で理解しようとする思考方法。→　I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God.
17. 近代日本のキリスト教の二つのフロント
↓
内村鑑三の日本的キリスト教

＜関連文献＞

０．日本のキリスト教、とくに内村鑑三
・土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980 年。
・宮田光雄『平和の思想史的研究』創文社、1978 年。
・関根正雄編著　『内村鑑三』清水書院、1967 年。
・『内村鑑三全集』『内村鑑三著作集』岩波書店。
・鈴木範久監修、藤田豊編　『内村鑑三著作・研究目録』教文館、2003 年。
・芦名定道　「第５章　民族主義と平和、第３講　思想」、芦名定道・土井健司・辻学『現代を生きるキリスト教』(改訂新版）教文館、2004 年、226-232 頁。
１．民族について
・蓮實重彦・山内昌之編　『いま、なぜ民族か』東京大学出版会、1994 年。
・小熊英二　『単一民族神話の起源――＜日本人＞の自画像の系譜』新曜社、1995 年。
・小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会、2002 年。
２．東アジアという問題設定について
・宮嶋博史・李成市他編『植民地近代の視座――朝鮮と日本』岩波書店、2004 年。
宮崎博史「東アジアにおける近代化、植民地化をどう捉えるか」
李　榮薫「民族史から文明史への転換のために」
３．日本的霊性、日本的キリスト教
鈴木大拙（1944)『日本的霊性』(『鈴木大拙全集[増補新版]』第八巻）岩波書店。
(1946)『霊性的日本の建設』(『鈴木大拙全集[増補新版]』第九巻)。　(1947)『日本の霊性化』(『鈴木大拙全集[増補新版]』第八巻)。
内村鑑三（1990)『世界のなかの日本』(内村鑑三選集４)、岩波書店。